MAMIYA CAMERA-PHOTO LIFE SUPPORT

マミヤカメラクラブ事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-39-14 ワイズビル 株式会社ワイズクリエイト内

TEL.03-5689-2776 FAX.03-5689-2786

E-mail :info@mamiya-club.com

●マミヤカメラクラブの入会お申込み等お気軽にお問い合せください。
●撮影会・イベントのお申込み・お問い合せを承ります。
●下記、ホームページでも詳しくお知らせ致しております。是非ご覧ください。

マミヤカメラクラブホームページ　http://www.mamiya-club.com/

●株式会社ワイズクリエイトでは、下記のような業務を行っています。

◎フェーズワン製品・大中判カメラ販売を致しています。
◎撮影アクセサリー、ザックの販売を致しています。
◎プロラボ現像・プリントを承ります。
◎撮影会・ワークショップ・セミナーを開催しています。

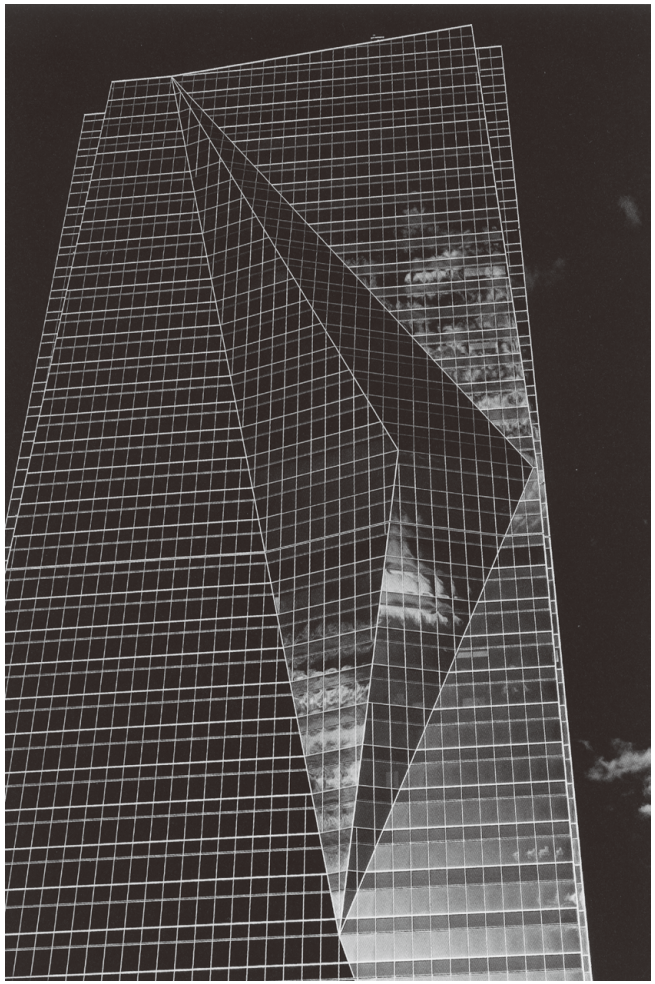
ワイズクリエイトは写真を通じて人と人、人と自然との コミュニケーションを確立する事を目的とするフォトオフィスです。
大中判カメラ専門ショップを展開、自然写真家、山岳写真家による写真セミナー、撮影会の開催、写真集の出版、写真レンタル、各種制作業務等、写真に関するソフトとハードあらゆる業務を行います。

www.yscreate.co.jp

日本の四季を撮る！

ワイズクリエイトオリジナル
かさお君・ワイド
★雨や雪の撮影の必需品です。
★三脚に専用クランプでがっちり固定、便利なフレキシブルアームの採用で傘の向きも思いのまま。
★アームと傘はワンタッチジョイント方式で、ブレを気にせず傘を引き抜いての撮影が出来ます。
★480ｇと軽量で三脚に付けたままの移動も可能。
★フレキシブルアームにゴムを装着してブレ止め装置にも変身。
★折り畳みの専用傘付属で晴天時の晴れぎれにも使用可能。
★ワイズ価格：13,500 円＋税

Mamiya Gallery



マミヤカメラクラブ会報誌

Vol. 34 2019

©photo by Kenji Ishida

「普通で無いものを撮りたくて」

赤外写真撮影をライフワークに。写真家石田研二さんに聞く。

現在愛用の赤外線専用シグマカメラ

石田　研二（いしだ けんじ）
1949年、京都生まれ。大阪芸術大学デザイン学科卒業後、野町和嘉氏に師事。コマーシャルフォトグラファーとして活動する一方、フォトボランティアジャパン運営委員としても活動。東洋美術学校講師。日本写真家協会（JPS）会員。

— 赤外写真とは —
近赤外線を撮影した写真で、サーモグラフィーが遠赤外線を撮影するのに対し、赤外線写真は近赤外線と若干の可視光線を撮影する。赤外線写真で撮影される光の波長は約700nmから900nm。撮影の際には、通常「赤外フィルター」を使用する。このフィルターは可視領域の波長の光の大部分を遮断するものであり、黒か深い赤色をしている。通常の写真より空が暗くなり、大気の霞が写りやすくなる。空が暗くなるため、それを反射しての水面からの赤外線も減り、雲や靄がより明瞭に撮影されるようになる。デジタルカメラの場合にはカメラに組み込まれているローパスフィルター（遮断周波数より低い周波数の成分はほとんど減衰させず、遮断周波数より高い周波数の成分を逓減させるフィルタ）を取り外す必要があります。

今回の巻頭企画は広告写真家として活躍し、プライベートでは赤外写真撮影に情熱を燃やす石田研二さんに登場頂きました。写真との出会いからプロ写真家になるまで、更にはプロとしての仕事への拘り、写真展開催への取り組みなどもインタビューしました。（木戸）

写真・カメラとの出会について——

明治生まれの父親が旅館の写真を撮影し、パンフレットを作る仕事をしていたので、子供の頃からカメラとの接点がありました。自分では中学生の時にオリンパスペンを使い出したのを記憶しています。

その後、高校 1 年の時にビートルズに興味を持ち、衛星放送テレビの画面をハーフサイズフィルムで撮影していました。また、近所のカメラ屋さんと仲良くなり、手軽に印画紙を入手することが出来たので、自宅の押し入れに暗室を作ってしまいました。ただ、引き伸ばし機が無かったので当時流行っていた幻灯機を少し改造し、引き伸ばし機代わりに使っていました。もちろん、プリントの多くは衛星放送画面や友人から借りたビートルズのジャケット写真で、これが面白くてモノクロプリントにのめり込んでしまいました。

そして、高校では写真部に入部しました。当時は撮影するよりも引き伸ばし作業がしたくて、それには撮影しフィルムが無ければと写真も撮り出しました。人前に発表した写真としては、中学生の時からボーイスカウトに所属していたモノですから、大学生の時に「ボーイスカウトジャンボリ」と言う大きなイベントがあり、その記録写真係になった事からでした。大きな大会という事で、皇太子殿下をはじめ皇族の方々も来場され、この写真を撮影し、直ぐに現像・プリントして翌日の会場で一般公開していました。

高校生の時、将来的に写真で稼ぎたいとの思いが強くなり、関西の写真学校に入学しようと思ったのですが。当時は写真をメインとする学校が無く、大阪芸術大学のデザイン学科に入学し、写真を専攻しました。因みにデザイン学科の内、写真専攻は 10 人くらいでした。

京都生まれで何故東京に——

大学生の時から「写真で稼ぐには東京しか無い」と思っていました。と言うのも、大きな出版社の多くが東京に在ったからでした。そのために学校の授業では習えない実際の写真現場を勉強しようと、アルバイトも兼ね大阪のプロ写真家のアシスタントをやりました。特にプリント作業に精を出しましたね。大学卒業後直ぐ東京に出るつもりでしたが、当時アシスタントを務めていた写真家のどうしてもと言う引き留めで、半年間だけの約束で在阪で仕事をしましたが、半年後に即上京しました。

東京でプロ写真家になったのは——

上京したと言っても、何所で働くという当ても無い状態でした。東京のデザイン会社に務めるグラフィックデザイナーだった兄の家に居候させて貰い東京生活がスタートしました。運が良かったのは、兄のデザイン会社の社長とも懇意にして頂き、社長のご紹介により写真家の杵島隆先生に作品を見てもらう事が出来たことです。杵島隆先生のアシスタントになれるかなとの期待もあったのですが、作品を見て「君はもう独立しなさい！」と、嬉しいやら、悲しいやらのお言葉を頂いてしまいました。それでも杵島隆先生とのお付き合いはその後も長く続きました。

そんな時ですが、兄の会社でスキーメーカーのパンフレットを制作する仕事が入り、写真家の野町和嘉さんが撮影を担当されることになりました。その仕事のデザイン会社側からの助手として撮影にアテンドすることになり、これが縁で野町和嘉さんの事務所に入る事が出来たのでした。

プロ写真家としての仕事は——

野町和嘉さんの事務所に入りましたが、野町和嘉さんはサハラ砂漠などへ長期取材が多く、ほとんど事務所に居ない状態が続きました。その空いているスタジオや機材をお借りし、兄のデザイン会社からの仕事を受けて撮影が増えて行きました。そんな仕事も順調で儲かりだしてからはスタジオ使用料をお支払いするまでになりました。また、この時の仕事の経験が更に撮影技術を磨く結果になったと言っても過言では無く、大判カメラでの撮影も独学で習得しました。野町和嘉さんからは撮影に関して直接の指導はありませんでしたが、海外で撮影した作品の整理等をお手伝いして、良い作品を数多く見られたことが何にも代え難い勉強になったと思っています。

— 写真展 —

1989年：「リフレクション」（銀座キャノンサロン）
1990年：「グッディ サンシャイン イン TOKYO」（新宿コニカギャラリー）
2003年：「It'a kenji world Ishida&Friends Photo exhibition」（中野Galleryさえん）
2009年：「僕の水槽」（アートグラフ銀座）
2013年：「Daytime Infrared Images」晴れた日に（六本木ホテルアイビス）
2014年：「Daytime Infrared Images」〈Flare〉（EIZOガレリア）
「Daytime Infrared Images」晴れた日にII（COSMOS）
2015年：「Daytime Infrared Images」HOTARYNA（EIZOガレリア）
2016年：「Infrared Photoraphy2016」赤外線撮影の世界（EIZOガレリア）
2018年：「Infrared Photography2018」赤外線撮影の世界「形」（EIZOガレリア）
2019年：「Daytime Infrared Images」Shadows and Light（ギャラリーEM西麻布）

写真上2枚は2019年1月に開催した写真展「Shadows and Light Rart2」の案内はがきです。沢山の方々が来場され大好評でした。会場で販売されていた写真展図録があります（税込1000円）。興味のある方は是非お求めください。
sutadio-k@d9.dion.ne.jp

写真家として 10 年転機——

野町和嘉さんの事務所に 10 年ほど在籍し、かなり稼ぎも良くなりましたが、一念奮起、「世の中をもっと見てみよう！アメリカ行こう！」と決心しました。英語も話せず、初めての外国、初めての一人旅でした。ペンタックス67と一眼レフを持参し、アメリカでの撮影の仕事も幾つかこなしましたが、メインは武者修行みたいなもので、ロスからニューヨークまで約２ヶ月掛けての旅でした。

旅が終わり日本に戻りましたが、２ヶ月も日本に居ないと撮影の仕事は他に廻ってしまい、元の仕事量に戻るのに半年以上も掛かってしまいましたが、兄の勤めるデザイン会社からの仕事等で頑張りました。その時撮影したのが主に大判カメラを使った商品撮影で、スポーツ用品、事務用品、電気製品などありとあらゆるものをアオリ技法を使って撮影していました。

また 10 年位して、野町和嘉さんの事務所が不動産等の関係で解散することになり、仲間と二人で代々木 4 丁目にかなり大きな事務所とスタジオを借り仕事に励みました。ここも約 10 年でバブルが弾けた影響で撤退を余儀なくされ、杵島スタジオに助っ人と言う形で家賃を払いながら仕事をさせて貰いました。

その後、杵島隆さんが亡くなりスタジオも解散し、今は代々木の共同事務所・スタジオで仕事をしています。以前は写真が出来るとクライアントに直接届けていましたが、フィルムからデジタルに変わり、今はメールに添付して送るだけと、クライアントとカメラマンのコミュニケーションが希薄になったと感じます。また、何所も撮影の内製化が進み世に出る写真のクオリティが落ちたと思います。

写真学校の講師は？——

杵島隆さんにご紹介頂き、日本写真芸術専門学校で大判カメラとライティングの講座を担当し、パンタンデザインでは暗室講座を、こちらも 10 年ほど担当致しました。現在は、新宿に在る東洋美術学校で撮影技術の講座を担当しています。学校では生徒に「オリジナリティを大事に！」と言っています。

赤外写真について——

赤外写真を撮影し出したきっかけは「異次元な感じモノのが撮りたかった」「普通で無いものが撮りたい」との気持ちからです。テーマは日常の町歩きから探す事や新聞を見ていて気になった場所へ行ってなどですね・・・それは桜の開花だったり、大きな水上バスだったり、ビルだったりですが人と違う感じで撮影したいですね。また、赤外写真に向き不向きの被写体があって、向いているのは雲、空、若葉等ですが、これらの手前に何かを配して撮影することが多いです。

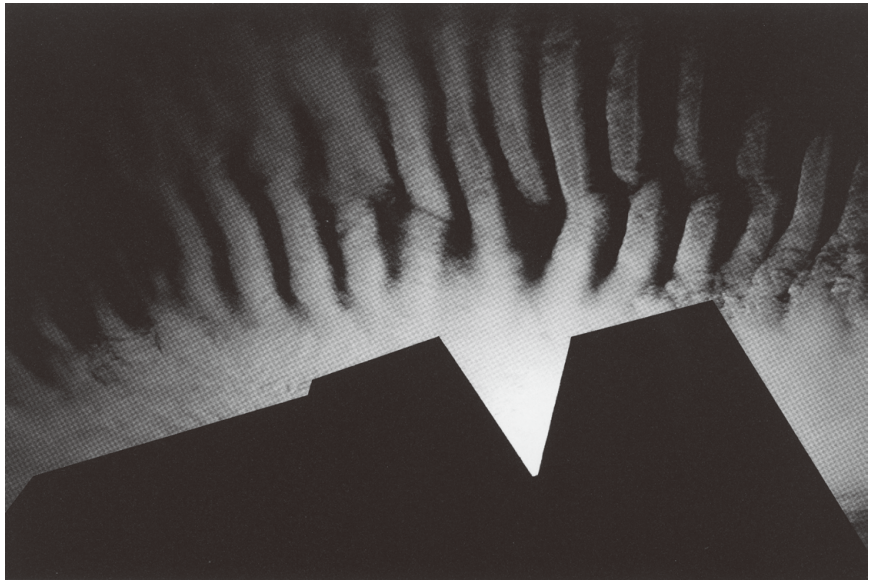
以前は赤外フィルムがありましたが、現在は販売されていませんからデジタルカメラで撮影します。デジタルカメラから赤外を除去する作用のあるローパスフィルターを取り外して使いますが、通常メーカーではこの様な改造はしてくれませんので、私の場合にはメカに詳しい友人に頼んで改造して貰いました。フィルムカメラの場合、開放絞りで1/15 のシャッターで撮影する事が推奨されていますが、現像が上がるまで写っているか分からなかったものです。しかし、デジタル赤外写真の良いところは、モニターで確認しながら撮影出来る事です。コントラストが強調されデザイン的な写真が出来た時は最高ですよ。

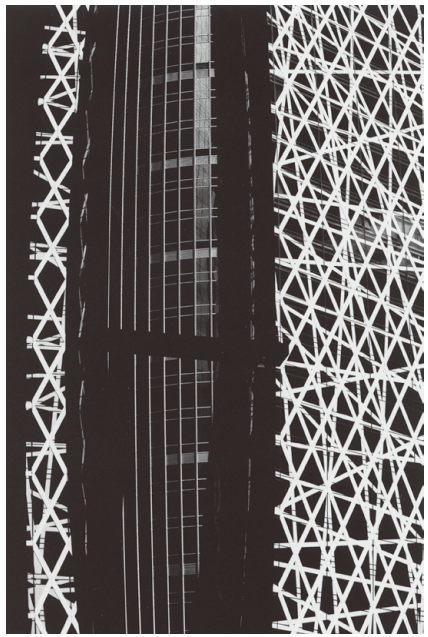
赤外写真撮影に関して教えてくれる所は無いと思います。前述のメカに詳しい友人が 5 台の赤外デジタルカメラを持っているので、少人数の赤外線ワークショップを開催出来たらという計画もあります。ご期待ください。

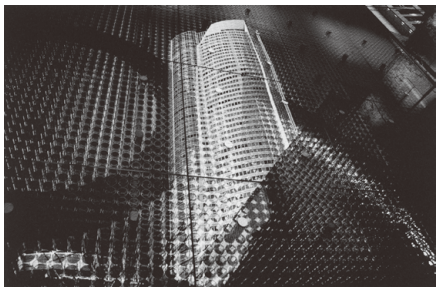
写真展とこれからのテーマについて？——

写真は撮影してしまっておくだけではダメで、やはり発表が大事だと思います。その発表の場が写真展だと思っています。ですからかなりの写真展を開催してきましたが、ここ何年かは赤外写真の写真展を開催しています。これからも赤外に拘った写真展を開催したいと思います。

また、京都生まれですから、京都の情景をオリジナリティある赤外写真で撮りたいですね。







石田研二さんはアマチュア写真家に対する写真啓蒙活動も盛んに行っています。
写真はポートレート撮影ワークショップ、風景写真撮影会、作品講評会等の様子です。

今回の特集ではカラー写真については触れられていませんが、カラー派の方々もご安心ください。インタビューには赤外写真ファイルの他にもカラー写真の作品も持参されました。ですが、写真の笑顔をご覧になればお分かり頂けるように、ついつい熱が入ってしまう説明は圧倒的に赤外写真でした。

「日本の森に魅せられて」

豊島 富三郎 さん

東京生まれで都会しか知らなかった私は、学生時代に初めて丹沢に行き自然の世界を知ることになった。社会人の山歩会に入り頻繁に山登りをするようになり、カメラを手にして撮るのはピークの写真ばかりであったが、歳を重ね、65 才に4000m級のピークを撮影したのが最後となった。

2001 年に参加した写真家・石橋睦美さん指導の「日本の森ワークショップ」撮影会で、森の美しさに魅せられて以来、仕事優先の不肖の弟子ではあったが、時間の許す限りワークショップに参加することになる。

ワークショップは 10 年程続き、北海道から沖縄まで何十の森を巡っただろうか。日本には四季があり、そして梅雨の季節もあり、森はいつも違う表情を見せてくれる。それぞれ与えられた環境で、木々、植物が生命を育んでいる光景に毎回感動させられる。

撮影で心掛けているのは、色、艶、雨後の石の濡れ具合、木々や巨木の持つ佇まい、森の静寂感をフィルムに写し撮ること。仲間の撮る作品に刺激され、とうとう大判カメラまで始めてしまうことになる。

今後はのんびりと神社･仏閣を巡り撮影したい。年齢を考えるとデジタルカメラになるだろうが・・・。

豊島　富三郎（とよしま とみさぶろう）

1930 年生まれ。埼玉県在住。写真をはじめたのは、大学時代。マミヤとの出会いはマミヤフレックス。風景写真にのめり込んでからは、画質と機動性がよい中判カメラや情報量の多い大判カメラで撮影。「マミヤカメラクラブ」「ワイズ大中判写真の会」「日本リンホフクラブ」所属。

http://www.mamiya-club.com

マミヤカメラクラブ最新情報は
ホームページでご確認ください。
ホームページは変身予定です。

いろいろな場所でいろいろな事が起こる今の時代ですが、これらの情報を得るのには、従来の紙媒体や電波媒体からインターネットや SNS を活用した情報入手段への変化が多々見受けられるようになりました。

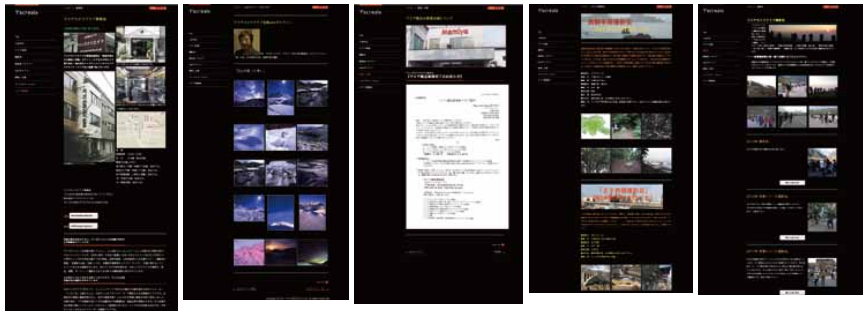
マミヤカメラクラブ事務局と致しましても、インターネットを中心とした情報発信をこれまでよりも強化して行こうと考えています。ご存知のようにマミヤカメラクラブのホームページは左記の通り存在致しますが、果たしてどれだけ活用されているかは現在のところ分かりかねております。しかし会員各位からのホームページを利用したお便りや、ご要望は大変少ないのが現状です。

そこで新年度からはマミヤカメラクラブのホームページを強化して、会員各位との相互情報交流のアイテムとして充実して参りたいと考えております。現在、同ホームページでは撮影会等の告知や修理インフォメーションなどの情報提供を行っていますが、撮影会終了後の現地レポートなども新たに取り入れ、より会員の皆様の身近なものになるよう検討中です。

また、会員ならば誰もが作品を発表できる「マミヤカメラクラブ web ギャラリー」への作品発表の勧誘や制作のお手伝いも従来に増して強化するよう努力する所存です。

「マミヤ」ブランドのカメラを扱うメーカーは既に無くなって、これに伴い新規会員の入会も見込めない現状ですが、フィルム文化を少しでも継承できる様に微力ながら尽力させて頂きますので、会員の皆様も是非新しいホームページ作りにご協力を頂きたくお願い致します。

マミヤカメラクラブ事務局



マミヤカメラクラブでお馴染みの木原浩さん、吉村和敏さんの新刊書籍のご紹介

BOOK

マミヤカメラクラブ会報誌 26 号の巻頭特集に登場頂いた植物写真家の大家・木原浩さんが「季節の植物図鑑　野の花づくし」、同じく 27 号の巻頭特集に登場頂いた世界を駆け回る写真家・吉村和敏さんが「写真集 Du CANADA」を出版されました。今号ではその魅力に触れたいと思いますので是非お求めください。

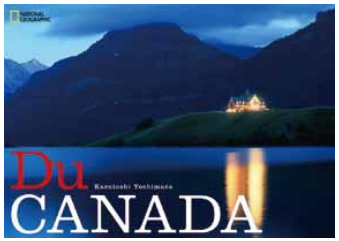
季節の植物図鑑［春・夏編］
野の花づくし

植物写真の大家でもある写真家の木原浩さんが「野の花づくし」と言う植物図鑑（写真文集）を出版されました。木原浩さんは1947年に東京で生まれ、1969年大学中退後に山岳写真家白川義員氏の助手として半年間ヒマラヤに同行。1970年に植物写真家故・富成忠夫氏の助手となり、1976年の独立後は野生植物を中心に積極的な撮影をされ、図鑑、雑誌、カレンダーなどに多くの作品を発表している写真家です。私たちが何気なく目にしている植物写真を撮影している写真家でもあるのです。Amazonの書籍検索で「木原浩」と打つと植物関係の写真集、図鑑が沢山登場します。平凡社のホームページに書かれた「木原浩の詩情あふれる植物写真でつづる日本の四季。オールカラーで、撮影秘話のほか、草花の特徴をとらえ美しく撮影するコツなども分かりやすく解説。上巻は、春と夏の植物。」とあります。かなり見応え、読み応えのある書籍だと思います。Amazonで購入可能。

「野の花づくし」著者：木原浩
出版社: 平凡社
ISBN-13: 978-4582542554
価格：3000円（税別）

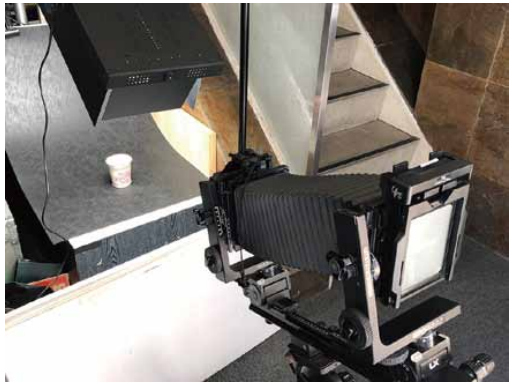
どちらも
2019年2月22日出版
の新刊です。

NATIONAL GEOGRAPHIC
Du CANADA



写真家の吉村和敏さんが新刊書籍の「吉村和敏 写真集 Du CANADA」を出版されました。今回の写真集は、日経ナショナルジオグラフィック社からの発行で、発売が日経BPマーケティングという組み合わせで、羨ましいくらいの布陣です。A4サイズの横判ハードカバーのページを捲ると「これこそが吉村和敏ワールド」という写真が目に飛び込んできます。透き通った空気感までも写し込んだような雄大なカナダの風景が眩しく感じます。書籍紹介の中に「冬から春、夏、秋、そしてまた冬へ　季節をめぐり広大な大陸を渡るような気分で、ページをめくっていけば、見たことはないが、どこか懐かしい自然を楽しみ、ゆったりした時間を生きている人々と出会えるはず。気がつけば、世界から愛される国カナダが、なぜそんなふうに愛されるのか、そのわけを感じてもらえるだろう。」とあります。書籍はAmazonでも購入可能です。皆さんも是非手に取ってじっくりご覧頂きカナダ旅行をお楽しみください。

吉村和敏 写真集「Du CANADA」
出版社: 日経ナショナルジオグラフィック社
ISBN-13: 978-4863134171
価格：3200円（税別）



大判カメラのすすめ

その 14

今回の撮影は、撮影台（段ボール箱でも可）の上にカップヌードル容器を置き、ホースマン LX ビューカメラにフジノン C300mm を装着し、インスタントフィルム（期限切れです）で行いました。また、照明は写真用蛍光灯装置です。

今回の「大判カメラのすすめ」は、もう一度基本に戻り、形の修正アオリとカメラポジションについて勉強したいと思います。選んだ被写体は私達の身近にあるカップヌードルです。カップヌードルの容器を、カメラポジションを変え、更にアオリ技法を駆使し、実際にインスタントフィルムを使用して撮影してみました。その違いを実感頂けたらと思います。また、このようなシチュエーションでの撮影は皆様の自宅でも可能です。撮影しないまでも、ピントガラスを覗いて実際にお確かめください。

（木戸）

ⓐ

【カメラポジション（アングル）について】

カップヌードルのような商品を撮影する場合、その商品が幾つの面で構成されているかを見極めてください。分かり易い例としては、ティッシュペーパーの箱は上面、下面、４つの側面で構成されています。この内、カメラのファインダーで写し取れるのは通常上面と 2 つの側面です。この 3 つの面の比率をどの位にするかが、商品撮影の重要な要素となります。

基本的には、商品名が大きく印刷されている面をメインと考え、奥行きや大きさを表現するために、あとの２面の比率を考慮することになります。

では、カップヌードルの容器に当てはめると、容器はフタの部分が上面ですが、残り２面については、円形容器のため１面であると解釈できます。もちろん、「CUP NEEDLE」の商品ロゴが一番見える場所をメイン面と考えます。要するに、メイン面と上面の比率が一番良好になるようなカメラポジションを決定することです。

ⓐの写真は、容器正面にカメラをセットして撮影しました。上面が写らず（多少写っていますが）初めて見る容器だとすると、丸い容器であることが認識できない可能性もあります。

ⓑの写真は、かなりカメラポジションを高くして撮影しました。上面部分が大き過ぎて、メイン面の商品ロゴが埋没しているようにも感じます。

ⓒの写真は、ある程度カメラポジションを下げて撮影しました。このポジションで OK と思う人もいると思いますが、私個人としては、未だメイン面が弱いのではと感じます。

ⓓの写真は、メイン面が８割、上面が２割ほどの構成で撮影しました。容器の丸みと高さも表現でき、更にメイン面「CUP NEEDLE」のロゴも際立ち、ベストなカメラポジションであると思います。

このようにカメラのポジションによって、商品がより良く見えることを理解して頂き、実践してみてください。

ⓑ

ⓒ

ⓓ

【次はアオリを使って撮影してみよう】

さて、カメラポジションが決まったら、次はいよいよアオリ技法を使って撮影してみましょう。

ⓓのノーマル写真からアオリを使うのですが、先ずはカップヌードルは撮影台の上に垂直に置かれているとの解釈から、ビューカメラのバックアオリを垂直に近づけ、更に、フロントアオリも同様にして撮影したのが写真ⓔです。ただ、カップヌードルの容器が上部から下部に狭まっているためにその効果はあまり表現されていません。

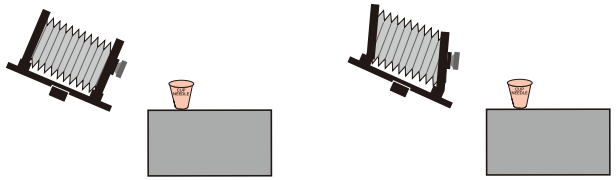
写真ⓕは、写真ⓔの状態から、更にバックアオリとフロントアオリを完全に垂直にして撮影しました。これで、ⓓの写真と比べると容器の高さも表現されアオリ撮影としては完成型に思えます。

次に、形の修正アオリをオーバーな表現にして撮影してみたいと思います。写真ⓖは、バックアオリをチルトの用に倒し容器上部を実際より伸ばして撮影してみました。実際の容器よりかなり細長いイメージになったと思います。

写真ⓗは、バックアオリを垂直より越えて容器下部を伸ばして撮影しました。このカップヌードルなら通常バージョンの 1.5 倍くらい中身が詰まっていそうですね。

そして写真ⓘは、写真ⓓの状態から、バックアオリのスイングを使って容器を横に伸ばしてみました。ちょっと不格好なカップヌードルでした。

いかがですか？大判カメラを使っている人ならば誰でもこのような撮影表現が可能です。特に、バックアオリは形を変えるアオリ技法であることを認識し、撮影して頂ければと思います。因みに、今回の被写体はカップヌードルでしたが、これは人物撮影にも適用することができます。６～７頭身の人物を８～９頭身にして撮影したり、太っている人を痩せて撮影することも容易いと思います。大判カメラは風景写真撮影の為に使っていると言う方も多いと思いますが、たまには違う被写体をアオリを使って撮影し、本番の風景写真撮影でも活用してください。



《編集後記》今号にご紹介しました「東京下町界隈 カメラ散歩」が各所で好評を頂いています。つい先日も共同通信社からの取材がありました。約 1 時間の取材内容は書籍の制作コンセプトや出版後の反応などでしたが、特に、書籍の中に QR コードを使用しての動画情報提供については、今までに無かったとのことで念入りに聞かれ、私がジンバルに iPhone をセットしての動画撮影光景もカメラに納めて行かれました。掲載予定写真は、本の表紙と QR コードが掲載されたページのアップが使用されるようですが、もしかしたら iPhone＋ジンバルを構える私の写真の掲載もあるとか・・・・。因みに共同通信社からの取材は２回目で、2012 年の前回は「大判カメラに拘る人」として全国に記事配信されました。今回は４月中に文化面の記事として配信されるとのことで、各新聞社によって掲載日が異なりますが、もしご覧になった場合教えてください。　　木戸 嘉一

ⓔ

ⓕ

ⓖ

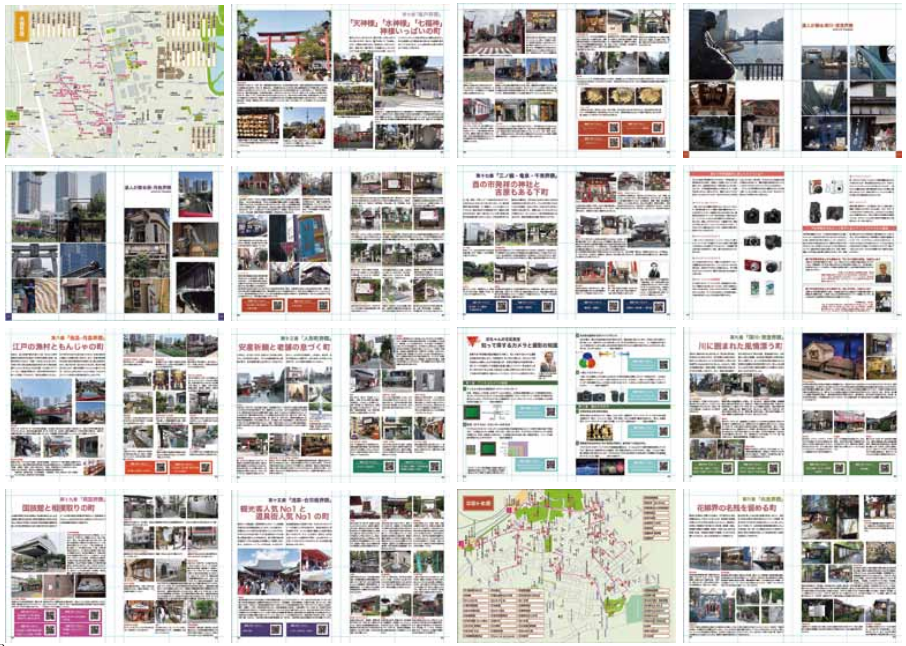
ⓗ

ⓘ

発売開始！

マミヤカメラクラブ会報誌号外でもお伝えしました通り、4 年の月日を掛けて制作してきました書籍「東京下町界隈 カメラ散歩」が無事完成し、3 月 20 日に正式に発売されました。発売早々、多くの方々から注文を頂き「東京下町」と「散歩写真」に対する興味の深さを窺うことが出来ました。また、「写真撮影には興味はありませんでしたが、本を読んで散歩写真に興味が湧いてきました」と言う中年女性は、「友達の分として 5 冊追加注文します」との嬉しい事例もありました。今号では、もう一度この「東京下町界隈 カメラ散歩」について解説をさせて頂くと共に、5 月 11 日（土）開催予定の第 23 弾目となる東京下町界隈散歩・王子界隈撮影会もお知らせしたいと思います。カメラ散歩に興味のある方、町歩きが好きな方、是非ご参加ください。

◇書籍名　東京下町界隈 カメラ散歩
◇体　裁　B5 約 249 ページ全編カラー
◇発　行　2019 年 3 月 20 日
◇著　者　木戸 嘉一（株式会社ワイズクリエイト）
◇価　格　2,500 円（税別）



「東京下町界隈 カメラ散歩」

《出版のきっかけは？》

「東京下町界隈 カメラ散歩」の制作は、2015～2016 年の年末年始に開催した「本郷界隈撮影会」「谷根千界隈撮影会」からスタートしました。多くの参加者が集まる撮影会を開催するにあたり、事前にロケハンを何回も行い、写真撮影を前提にしたオリジナルのコースを設定しました。その結果、多くの参加者から好評を頂きました。その後、2016 年 5 回、2017 年に 6 回、2018 年に 7 回の合計 21 回もの撮影会を開催致しました。これこそが同書に収録されている東京の 21 にも及ぶ下町界隈なのです。

《出版コンセプトは？》

今、東京は大きく変貌しています。今まで在った昭和のイメージを残す古い建物もいつの間にか高層マンションになっています。何気なく通っていた商店街のお店もいつの間にか無くなっています。そんな日々刻々と変貌する東京の風景を肌で感じながらカメラ片手に歩いてみたいをコンセプトに、同書は懐かしき東京の風景が残る下町 21 エリアをセレクトし、実際にカメラを持ち何回も歩いてオリジナルのカメラ散歩コースをまとめてみました。

《革新的な特長とは？》

町歩きや散歩の本は多く目にします。ただ、これらは写真とテキストとイラスト（地図）の 3 つの要素で構成され、本を読んで実際に現地に行くと、そのギャップに驚く場面が多くあります。それは莫大な地域情報を 3 つの要素で表現する限界だからだと思います。同書では、これを解決する手段の一つとして、QR コードを採用し地域動画へリンクさせる革新的な方法を採用しました。散歩動画 163 編により情報量の拡大や周辺情報までも見ることが出来るようになりました。更に、達人写真家の作品掲載や、写真撮影をする上で重要な撮影技法や撮影機材等に関しましても、この QR コード～動画方法を採用し、経験豊富なインストラクターが動画 21 編で解説しています。必ずや写真撮影が上達するものと思います。

《散歩人口について？》

2016 年に実施されたある財団の「成人の散歩・ウォーキングの実施状況」で、散歩人口は過去 20 年で 2 倍以上になり、60 歳以上のほぼ 2 人に 1 人が週 1 回以上実施していることが判明。更に、大手旅行会社が日帰りの東京散歩をパッケージ化販売し、かなりの人気を博しています。これは変わり行く東京を懐かしむ中高年の気質と健康志向の二つの要因からなるものと考えられます。また、テレビでも散歩を扱う番組が増えているのも見逃せません。

《散歩写真について？》

写真撮影のカテゴリーは風景写真、山岳写真、スナップ写真、商業写真、人物写真などがメインでしたが、今後、新たなカテゴリーに「散歩写真」が仲間入りすることを確信しています。この、「散歩写真」と言うマーケットに関してはカメラ・用品メーカー、更にはカメラ店も営業参画すると予想します。それはこのカテゴリーに対して、何所も手を付けていないからこそです。ある意味、無垢の散歩マーケットにカメラ・用品メーカーがアクションを起こすことは、販売戦略として間違ったことでは無いように思えるからです。

【王子界隈撮影会】

王子と言えば第八代将軍・徳川吉宗が享保の改革のひとつとして整備した桜の名所・飛鳥山や東国三十三国稲荷総司の王子稲荷神社などが有名ですが、これだけではありませんよ。王子神社、名主の滝公園、音無親水公園、神田川流域の寺社や緑地(断層もあり)など写真に収めたい被写体も一杯です。王子界隈をカメラを持って歩きましょう。

■開催日　5 月 11 日（土）12 時 30 分～
■撮影地　「王子界隈」
■集　合　ＪＲ王子駅北口前
■案　内　木戸嘉一（ワイズクリエイト）
■参加費　1000 円（オリジナル地図付）
■申　込　事前に参加お申込みください。
■備　考　歩き易い服装でご参加ください。